

相互依存関係の予期と自尊感情レベルが 自己開示・秘匿意向に及ぼす効果

—— 対人関係の親密化過程における自己開示機能について ——

下斗米 淳

問 題

Jourard (1958) は、Rogers (1951) の来談者中心セラピー論や Maslow (1954) の自己実現論を基盤に、初めて自己開示という用語を使って開示者の精神的健康に関するそのカタルシス機能の重要性を指摘した。以来、例えば成就 (fulfillment) から社会的学習 (social learning) に至るまで様々な観点から、心理療法と自己開示との関係を描出するモデルが提出される (Doster & Nesbitt, 1979) など、臨床心理学の領域において、今日まで膨大な量の自己開示研究が生み出されてきた。

しかしそうした経緯の一方で、自己開示を“人Aが自分に関する情報を言語的に人Bに対して伝達する行為 (cozby, 1973, p. 1)”と捉え、コミュニケーション行為の1つとして想定される、その対人的機能についても多くの検討が繰り返されてきている (cf. Derlega & Grzelak, 1979; Archer & Earle, 1983)。

ところで近年、社会心理学の領域では、対人関係の親密化過程 (acquaintance process) について、そこで認められる相互作用の様相の差異から、幾つかの段階に分けて説明を試みる理論 (stage theory) が提出されて

きている (Kerckhoff & Davis, 1962; Levinger & Snoek, 1972; Lewis, 1972, 1973; Murstein, 1977)。下斗米 (1992) は、こうした段階理論を概観し、いずれにおいても概ね、関係がある段階を迎えると、自己開示が互いの人物の情報交換の手段として特に意味をもつ、と考察している点で共通すると指摘している。また、Altman & Taylor (1973) の社会的浸透理論によれば、対人関係の深まりは当事者間の自己開示の内面性 (intimacy) レベルと対応しており、各々の段階において、自己開示は関係の更なる進展、あるいは維持、後退を決定する上に必要不可欠な行為であるとしている。自己開示は、対人関係の中で互いの情報を提供し合い共有するための手段となっていると言えよう。

では、自己開示の発現が当事者相互についての情報の共有を促すとすれば、次にその共有された情報がいかなるメカニズムによって、対人関係の親密化に影響を及ぼし得るのであろうか。この点について下斗米 (1990a, 1990b, 1991a, 1992) は、対人関係の親密化を、当事者が“自己開示の交換を通して徐々に明らかにし合った両者の類似・異質点にもとづいて、特定の行動を遂行するように期待し合い、お互いの影響力を強めていく過程 (下斗米, 1991b, p. 1.)” と考え、まず自己開示、ついで対人認知、そして役割行動の期待と遂行という3位相から親密化過程を理解することの有用性を強調し、実証を試みている。この考えに従えば、自己開示は、次の位相である類似・異質性認知において、その材料としての情報を提供するという意味で認知の妥当性に影響を及ぼすと言えよう。

ところが、自己開示は様々な対人的文脈をこえて常に一様であるとは考えられない。かつて Gergen & Wishnov (1965) は、“他者に示す自分に関する情報は滅多にランダムでは選ばれない。われわれは通常、公に示すために適切な Self-Knowledge の巨大な Short house から選択するというジレンマに直面している (p. 348)” と述べている。また Thibaut & Kelley (1959) は、将来の相互依存関係を予期する者同士の出会いは堅苦しさ (formality) と気がね (constraint) に特徴づけられ、人はこれらによって、

後に不満足、すなわちコストに比して報酬の少ない関係とならないように自己開示を統制すると指摘していた。

これらの指摘を踏まえれば、人は、他者との類似・異質性認知を経て役割が適切に分担され、結果として、予期される将来の相互依存関係が満足いくものになるよう、自己開示ないし秘匿する自己の情報を選択しようとしていると考えられる。換言すれば、開示者にとって、将来被開示者との間に相互依存関係が予期されるのか、また、予期されるとすればいかなる構造の関係を志向するかに応じて、自己開示あるいは秘匿の意向に差異が生じることが予想されよう。

この点に関しては、例えば Taylor, Alman, & Sorrentino (1969) や Taylor & Altman (1975) は、報酬価の高い相互依存関係が予期されると実際の自己開示量が増大することを実証している。しかし、この将来の相互依存関係予期パラダイムでの自己開示研究の多くは、対人関係の親密化を念頭におくがゆえに協同関係に主たる関心が集まっており、また実際の開示量を測定するにとどまり、自己開示のみならず秘匿について、その意向の面から検討されることは、下斗米 (1986) や佐藤・下斗米・飛田 (1988) などで扱われてはいるものの、さほど研究は多くないようである。

そこで本研究では、こうした問題を背景に、将来の相互依存関係が予期されない場合、あるいは協同関係が予期される場合、競争関係が予期される場合の3つの対人的文脈を取り挙げ、人の自己開示と秘匿の意向に対する影響を考察する。

但し Derlega & Grzelak (1979) は、開示者は、自らの価値システムに照らして相互依存関係の報酬価を査定すると示唆している。このことはすなわち、開示者個々人で満足と考える関係が異なることを意味するものであろう。確かに、Gergen & Wishnow (1965) は、同一の関係を予期しながら、自尊感情レベル (self-esteem) の高い開示者と低い開示者とでは自己開示の質及び量に差異が生じると報告している。従来から、自尊感情レベルが対人欲求や行動に様々な影響を及ぼしている (e.g., 長戸, 1973)

相互依存関係の予期と自尊感情レベルが自己開示・秘匿意向に及ぼす効果（下斗米）

ことは知られている。

しかも、協同関係の成立基盤と考えられている信任 (trust), 受容 (acceptance), あるいは承認 (approval) について, それらを獲得する必要の生じた状況での自己開示が, 開示者の自尊感情レベルにより様相を異にしていることが示されてきた (Cravens, 1975; Ellison & Firestone, 1974; Rosenfeld, 1966)。また, 一方の競争関係においても, 成功への期待, すなわち報酬見込みが自尊感情レベルの高低で変動することが明らかにされている (Harvey & Weary, 1984)。自尊感情レベルは, 相互依存関係の予期に際しての報酬査定に影響を及ぼし, 結果として自己開示と秘匿の意向に変動をもたらすものではなかろうか。

本研究では, 以上の議論を踏まえ, 将来の相互依存関係予期パラダイムを用いて, 被開示者との予期される関係の構造という対人的文脈のなかで, 人は, 自尊感情レベルと照らして関係を満足いくものにするべく, いかなる自己開示及び秘匿を行おうとするのか, 検討することを目的とする。

方法

調査対象者

東京都内にある私立大学の, 1年から4年までの学生男女110名(男子26名, 女子84名)を調査対象とした。年齢範囲は18歳から25歳までである。このうち, 回答不備の者1名を除き, 109名が最終的な分析対象とされた。

調査内容

本研究は, 質問紙調査によった。フェースシートにおいて, 回答者の年齢等デモグラフィック特性を問うた後, 以下の構成による質問紙に回答を求めた。

① 仮想場面の提示

本調査では、将来の相互依存関係予期要因（以下関係予期要因と略記）として、協同関係予期条件（COO 条件と略記）、競争関係予期条件（COM 条件と略記）、予期関係無条件（NON 条件と略記）の3条件いずれかに操作された仮想場面を刺激として提示し、その場面の当事者になったと想定の上、自己開示を尋ねる場面想定法が用いられた。

仮想場面のストーリーの概要は、次の通りである。常日頃大学で指導を受けている教授が募集したアルバイトを「あなた」は行うことにした。後日、実際の作業に入る前のガイダンスを受けに研究室へ行ったところ、「あなた」は、全く初対面ながら自分と同様にアルバイトを行うことになっている同性・同年齢の他大学の学生と2人で自由に会話する機会を得た、という場面設定である。

この刺激には、上記のストーリーに加え、実際にアルバイトを行う時の状況についても詳細に記述してあった。関係予期要因の操作は、Deutsch (1979) の実験状況を参考に、アルバイトを行う時の状況に関する記述によって操作した。COO 条件では、作業はガイダンスの後に行う他大学の学生と2人でチームとなり協力しながら行うこと、しかもチームとしての作業結果に応じてアルバイト代が2人に同額支給されることが説明されていた。COM 条件については、後に会う他大学の学生とは作業結果の出来不出来により報酬に差額がつけられるために、相手よりも作業結果の勝ることが要求される文章に変えた。NON 条件では、作業は参加者が単独に行うものであるから、その学生とはガイダンス以後会うことのない旨の文章になっていた。

なお、この刺激では、社会情緒的 (social-emotional) 関係の構築されていない初対面同士の会話場面を設定している。この理由は、被開示者との相互作用史を統制するためである。そこで、社会情緒的と対極にあると考えられる課題志向的 (task-oriented) な相互依存関係が想定されるように、国語・数学的能力を要する作業が課されている旨の文章を付加し、開示・被開示者間の相互作用が課題性を帯びていることを強調した。また、あら

相互依存関係の予期と自尊感情レベルが自己開示・秘匿意向に及ぼす効果（下斗米）

かじめ場面の構造上、自己開示の返報性規範がくずれたり、一方向的な開示が想定されないよう配慮して、対等な社会的勢力を互いに有し、かつ極端な公式・非公式（formal vs informal）関係ではなく中立的な関係が想定されるようにした。これら場面操作の妥当性に関しては、下斗米（1986）により確認されている。

② 自己開示と秘匿意向

開示及び秘匿意向の差異を抽出するために、Jourard & Lasakow（1958）、久世（1974）、鈴木（1981）を参考に、バックグラウンド、友人関係、恋愛関係、アルバイトの作業能力、趣味・嗜好、家庭生活、外観・健康、性格、態度・意見、進路の10領域、71項目を話題として設定した。その上で、それぞれの項目について、「是非知らせたい」内容を含む話題であるのか、「別段知らせても構わない」程度であるのか、あるいは「絶対知らせたくない」内容なのか、開示・秘匿意図を3カテゴリから尋ねた。

③ 自己開示内容の望ましさ

具体的に、いかなる自己の情報を開示しようとするのかについても吟味するため、各話題項目にそって自己開示される内容が、自らにとり「長所」、「短所」あるいはそのどちらとも言えないのか「？」の3カテゴリに反応を求めた。

④ 自尊感情レベル

調査対象者の自尊感情レベル（以下SEレベルと略記）を測定するために、Rosenberg（1965）のSEレベル尺度（10項目）邦訳版（山本・松井・山成，1982）を用いた。各項目それぞれについて、「あてはまる」（+2）から「あてはまらない」（-2）までの5件法により評定を求めた。

実施手続き

授業時に、将来の相互依存関係予期要因の3条件いずれかに操作した質問紙をランダムに配布し、集団施行した。3条件の人数内訳は、COO条件に35名（男子7名、女子28名）、COM条件では39名（男子8名、女子31

相互依存関係の予期と自尊感情レベルが自己開示・秘匿意向に及ぼす効果（下斗米）

名）、NON 条件に 35 名（男子 10 名、女子 25 名）となった。回答時間はおよそ 30 分であった。

結 果

自尊感情レベルによる群分け

SE 尺度邦訳版が自己全体への感情的評価を測定する単因子構造であるか否かを確認するために、主成分分析を行った。分析の結果、第 1（固有値 $\lambda_1=7.17$ ）、第 2 主成分（固有値 $\lambda_2=1.31$ ）でいずれも固有値が 1.00 以上を示していたが、寄与率の推移をみると、第 1 主成分ですでに 58.52%と全分散の半分以上が説明されており、第 2 主成分では寄与率も 10.67%とかなり低いことが明らかとなった。そこで単因子構造であると判断し、10 項目の評定値合計点をもって対象者の SE レベルと定義した。

その上で、平均値と標準偏差を算出し（平均値 $\bar{x}=4.11$ 、標準偏差 $s=8.46$ ）、平均値より高得点の者を高 SE レベル群、低得点者を低 SE レベル群とした。この結果、関係予期要因 3 条件における SE 条件 2 群の人数内訳は、COO 条件で高 SE レベル者が 16 名、低レベル者が 19 名、以下同様の順で COM 条件が 19 名と 20 名、NON 条件では 20 名と 15 名となった。

自己開示及び秘匿話題の選択傾向

予期される将来の相互依存関係の構造による自己開示及び秘匿意図の差異を、話題選択傾向から探索した。

まず、関係予期 3 条件間で、開示・秘匿意向のより明確に異なっている話題領域と項目を見い出すために、各話題領域別に、3 条件を外的基準にとり、当該領域内の話題項目を説明変数とした数量化Ⅱ類理論による分析を行った。その結果、バックグラウンド、友人関係、そしてアルバイト能力の相関比が相対的に高く（各々第 1、2 軸の順に、相関比 $r_{\text{background}}=.38$ 、 $.07$ ； $r_{\text{friendship}}=.28$ 、 $.17$ ； $r_{\text{task}}=.36$ 、 $.27$ ）、判別精度の高い話題領域となっ

表 1
 関係予期要因 3 条件を外的基準、話題項目を説明変数とする
 数量化 II 類理論の結果

話題項目	ノーマライズド・スコア レンジ (偏相関係数)		話題項目	ノーマライズド・スコア レンジ (偏相関係数)	
	第 1 軸	第 2 軸		第 1 軸	第 2 軸
バックグラウンド			作業課題に関する能力特性		
・名前	134.29 (.52)	54.92 (.26)	・数学や国語への好みとその理由	29.30 (.10)	233.75 (.32)
・住所	49.12 (.22)	66.29 (.12)	・数学的能力と国語的能力とでの 相対的な自信度	94.46 (.35)	49.84 (.25)
・出身地	152.58 (.23)	143.77 (.29)	・協同する必要がある場面と競争 する必要がある場面とでの、相 対的な自信度	32.29 (.13)	95.48 (.35)
・家族構成	135.78 (.20)	53.82 (.00)	・協同あるいは競争して良くない 成績を修めた時の理由	102.15 (.38)	44.32 (.20)
友人関係			・協同あるいは競争して良い成績 を修めた時の理由	78.09 (.28)	73.96 (.21)
・同性・異性含めた友人の数	229.23 (.23)	77.15 (.17)	・アルバイトに応募した動機	11.48 (.02)	193.71 (.22)
・友人として相性の良い同性像	32.33 (.06)	170.07 (.38)			
・友人として相性の悪い同性像	54.31 (.21)	81.90 (.24)	相 関 比	第 1 軸	第 2 軸
・友人として相性の良い異性像	48.97 (.10)	130.41 (.35)		.561	.451
・友人として相性の悪い異性像	63.02 (.15)	141.18 (.30)	サンプル・スコアの平均値	第 1 軸	第 2 軸
・友人としてつき合う上で相手に 望む事柄	67.16 (.24)	75.63 (.27)	COO	92.43	-17.19
			COM	-27.26	60.57
			NON	-67.88	-55.02

ていることが示された。

そこで次に、判別によりよく寄与している話題項目を同定するため、これら3領域の項目全てを説明変数として、再度数量化Ⅱ類理論による分析を施した。各項目について、第1あるいは第2軸で算出されたノーマライズド・スコアのレンジと偏相関係数を勘案し、表1に示す通りの16項目を、3条件間の判別により寄与している話題項目として選択した。

表1をみると、第1・2軸の相関比が比較的高いことから、判別精度は良好であると言えよう。また、3条件毎のサンプル・スコア平均値に注目すると、第1軸ではCOO・COM両条件共正の値であるのに対して、NON条件のみ負の値となっている。一方、第2軸ではCON条件のみ正の値であることがわかる。従って、第1軸は将来の相互依存関係予期の有無を、第2軸は相手との関係の敵対性を反映しているものと解釈できよう。この結果は、すなわち、開示者が当該16項目に関する自己開示・秘匿意向を形成する過程に、被開示者との関係について、継続が予期されるか否か、及び競争関係か否かという2変数が影響を及ぼしていることを示すものである。

自己開示・秘匿意向タイプの抽出

自己開示・秘匿意向の特徴を抽出するために、判別力の高かった16話題項目について、開示・秘匿意向に関する3カテゴリの頻度にもとづいた数量化Ⅲ類理論を施した。分析では3軸まで抽出したが、第3軸の固有値は.14と極めて低いことから、以後第1・2軸をもとに検討を進めた。

第1軸と第2軸による2次元の、アイテム・カテゴリ分布図は図1に、サンプル・スコアの分布図は図2に示す通りとなった。そこで、2次元空間に布置する各アイテム・カテゴリ間のユークリッド距離を算出し、距離の近いもの同士をまとめてみたところ、図1に示すように、4群が見い出された。この結果は、将来の相互依存関係の構造に応じて、16項目に関する自己開示・秘匿意向が4タイプに分類されることを示している。

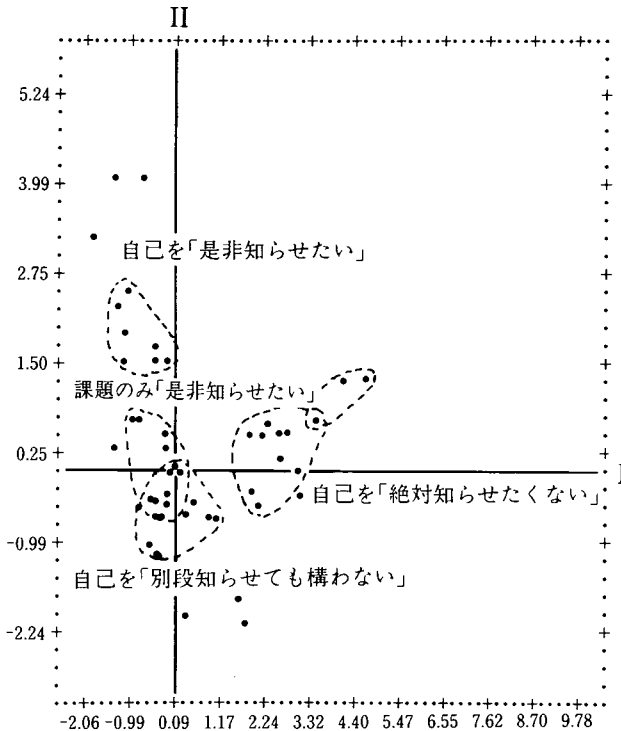


図1 アイテム・カテゴリのプロット図

これらの各タイプの特徴は以下の通りであった。

- a. 自己を「是非知らせたい」タイプ：この群内に布置する項目は、いずれも「是非知らせたい」をカテゴリにもつもので構成されている。すなわち、自分のバックグラウンド、友人関係及びアルバイト課題の能力に関する16話題項目にそって、自己を相手に「是非知らせたい」と考えているタイプである。積極的な自己開示意向を示すタイプと言えよう。
- b. 自己を「別段知らせても構わない」タイプ：ここに布置する項目の

相互依存関係の予期と自尊感情レベルが自己開示・秘匿意向に及ぼす効果（下斗米）

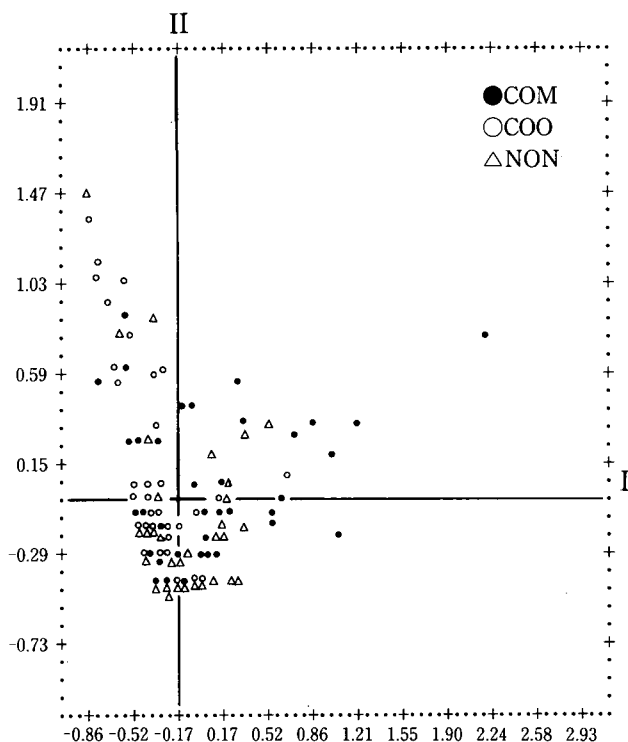


図2 サンプル・スコアのプロット図

カテゴリはすべて「別段知らせても構わない」であり、3領域いずれについても、相手に「別段知らせても構わない」と考えているタイプである。自己開示にも、あるいは秘匿についても、意向に積極性が認められないタイプと考えられる。

- c. 自己を「絶対知らせたくない」タイプ：この群を構成する項目のカテゴリはいずれも「絶対知らせたくない」となっていた。すなわちこの群は、3領域に関して、自己を相手に「絶対知らせたくない」と考えているタイプである。積極的な秘匿意向をもつタイプと言え

相互依存関係の予期と自尊感情レベルが自己開示・秘匿意向に及ぼす効果（下斗米）

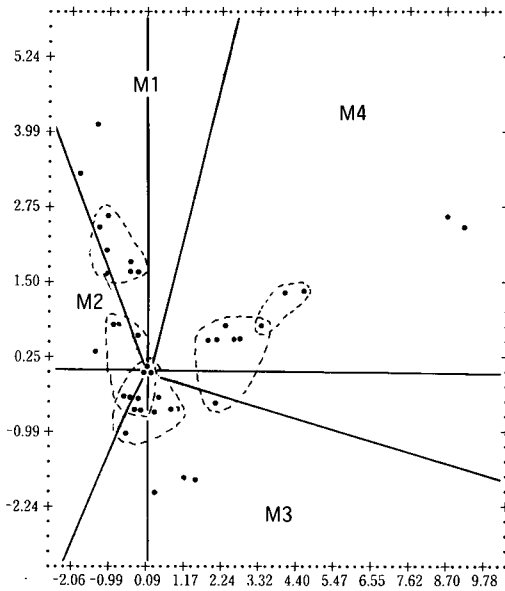


図3 自己開示・秘匿意向4タイプの布置領域

表2 関係要因3条件別、開示・秘匿意向4タイプの人数内訳

	「是非知らせ たい」タイプ (M1)	課題のみ 「是非知らせ たい」タイプ (M2)	「別段知らせ ても構わない」 タイプ (M3)	「絶対知らせ たくない」 タイプ (M4)	総計
COO条件	9(25.71)	14(40.00)	8(22.86)	4(11.43)	35(100.00)
COM条件	6(15.38)	7(17.95)	11(28.21)	15(38.46)	39(100.00)
NON条件	3(8.57)	4(11.43)	22(62.86)	6(17.14)	35(100.00)
総計	18(16.51)	25(22.94)	41(37.61)	25(22.94)	109(100.00)

相互依存関係の予期と自尊感情レベルが自己開示・秘匿意向に及ぼす効果（下斗米）

よう。

- d. 課題領域のみ「是非知らせたい」タイプ：アルバイトの作業課題に関わる自己の情報は積極的に相手に対して「是非知らせたい」と考えるもの、他の話題領域については「別段知らせても構わない」程度に留まるタイプである。課題遂行が最大の関心事として意識されているタイプであると思われる。

予期関係の構造と開示・秘匿意向との対応関係

関係予期3条件間における開示・秘匿意向の差異を検出するために、アイテム・カテゴリとサンプルの対応を探る。対応の検討は次の手続きによった。まず、アイテム・カテゴリの布置空間において、上述の4群の重心をそれぞれ算出し、各々隣合う群の重心間を結ぶ最短線分の中点を求めた。そして、原点から各中点を通る最短線分を設定し、その線分により区分される4つの空間を4タイプ各々の布置する主要領域と考えた（図3参照）。その上で、この領域をサンプルスコアの分布図に適用し、4タイプの布置領域それぞれに落ちたサンプルが関係予期3条件のいずれに属しているか、その人数を検討した。COO, COM, NON 条件別に4タイプの人数内訳をまとめた結果は、表2に示す通りであった。

表2から明らかかなように、関係予期3条件間では、自己開示・秘匿意向に顕著な差異が認められた ($\chi^2(6)=25.55, P<.001$)。まずCOO条件では、“課題領域のみ「是非知らせたい」タイプ”が4割と最多であり、次いで“是非知らせたい”タイプ”が3割弱で続き、これらを合わせると7割近くが、積極的な自己開示意向をもつ者で占められていることがわかる。これに対して、COM条件下では逆に、“絶対知らせたくない”タイプ”がほぼ4割程度見受けられ最多となっている。また、NON条件においては、“別段知らせても構わない”タイプで6割強が占められており集中していることがわかる。

但し、クラメール関連係数を算出したところ $V=.34$ が得られたこと

相互依存関係の予期と自尊感情レベルが自己開示・秘匿意向に及ぼす効果（下斗米）

表 3
 関係予期要因 3 条件X高・低SEレベル群別、長・短所に対する
 開示・秘匿意向 2 カテゴリへの分類比率(%)

			COO		COM		NON	
			HSE	LSE	HSE	LSE	HSE	LSE
名 前	長所	是非	100	100	100	100	-	100
		絶対	0	0	0	0	-	0
	短所	是非	-	-	-	100	-	0
		絶対	-	-	-	0	-	0
住 所	長所	是非	-	33	100	-	-	-
		絶対	-	0	0	-	-	-
	短所	是非	-	100	-	100	0	-
		絶対	-	0	-	0	0	-
出 身 地	長所	是非	100>	0	100>	0	-	-
		絶対	0	0	0	0	-	-
	短所	是非	-	-	-	50	0	-
		絶対	-	-	-	0	0	-
家族構成	長所	是非	0	0	50>	0	-	-
		絶対	0	0	0	0	-	-
	短所	是非	-	-	-	-	-	-
		絶対	-	-	-	-	-	-
同性・異性含めた 友人の数	長所	是非	0<	25	13>	0	0	0
		絶対	0	0	0	0	0	0
	短所	是非	-	0	0	0	-	0
		絶対	-	0	100>	0	-	0
友人として相性の 良い同性像	長所	是非	0<	75	60	60	100>	0
		絶対	0	0	0	0	0	0
	短所	是非	-	-	0	0	0	-
		絶対	-	-	100>	0	0	-
友人として相性の 悪い同性像	長所	是非	-	-	-	-	-	-
		絶対	-	-	-	-	-	-
	短所	是非	0<	17	14>	13	17>	0
		絶対	50	50	71>	50	67<	75
友人として相性の 良い異性像	長所	是非	0<	100	33>	0	100	100
		絶対	0	0	0<	20	0	0
	短所	是非	-	-	0	0	0	-
		絶対	-	-	0	0	0	-

相互依存関係の予期と自尊感情レベルが自己開示・秘匿意向に及ぼす効果（下斗米）

表 3（つづき）

			COO		COM		NON	
			HSE	LSE	HSE	LSE	HSE	LSE
友人として相性の悪い異性像	長所	是非	-	-	-	-	-	-
		絶対	-	-	-	-	-	-
	短所	是非	0	0	0	0	25>	0
		絶対	0<	50	80>	50	25<	100
友人としてつき合う上で相手に望む事柄	長所	是非	0	0	0	100	100	-
		絶対	0	0	0	0	0	-
	短所	是非	-	0	20>	0	0	0
		絶対	-	33	60<	80	50<	100
数学や国語への好みとその理由	長所	是非	60<	80	55>	33	86<	100
		絶対	0	0	0	0	0	0
	短所	是非	100	-	-	14	-	0
		絶対	0	-	-	29	-	0
数学的能力と国語的能力とでの、相対的な自信度	長所	是非	60<	75	67	67	50<	100
		絶対	0	0	0	0	0	0
	短所	是非	100>	50	0<	11	50>	0
		絶対	0	0	100>	86	50>	25
協同場面と競争場面とでの、相対的な自信度	長所	是非	40<	100	75<	100	33<	100
		絶対	0	0	25>	0	0	0
	短所	是非	0<	33	0<	25	0	0
		絶対	0<	33	100>	50	67>	20
競争あるいは協同して良くない成績を修めた時の理由	長所	是非	0	0	33>	0	0	0
		絶対	0	0	0	0	100>	0
	短所	是非	50>	33	0<	10	25>	17
		絶対	20>	10	55>	40	0<	50
競争あるいは協同して良い成績を修めた時の理由	長所	是非	30<	38	33>	17	17>	0
		絶対	0	0	11<	17	33>	0
	短所	是非	-	-	0	0	0	0
		絶対	-	-	100>	75	100>	50
アルバイトに応募した動機	長所	是非	60<	100	88>	50	100	100
		絶対	0	0	0	0	100>	0
	短所	是非	-	-	-	-	-	0
		絶対	-	-	-	-	-	100

注) - : 分類者無しを示す。

相互依存関係の予期と自尊感情レベルが自己開示・秘匿意向に及ぼす効果（下斗米）

から、自己開示・秘匿 4 タイプと関係予期 3 条件間の直接的な関連はさほど強いものではないと言えよう。この結果は、開示者の開示・秘匿意向が予期された関係の構造によって相対的に異なるものの、それのみではない他の規定因の存在を示唆するものと考えられる。しかし、方法の箇所既述の通り、本研究における COO と COM 条件の刺激場面は、協同一競争以外の次元はすべて同様の構造である。従って、更に考慮すべき要因としてはパーソナリティ変数であり、本研究では、開示者が自らおかれた状況を解釈し、開示・秘匿意向を形成させるに至る心理的過程に影響を及ぼし得る SE レベルが挙げられる。

SE レベルによる開示・秘匿意向への影響

まず、図 1 と図 2 とを対照させて SE レベルの開示・秘匿意向への効果を検討したが、2 次元空間上で高・低 SE 者が明確に分離されなかった。そこで次に、開示・秘匿意向 4 タイプに対する、関係予期要因、SE レベル、自己情報の内容（長所・短所）との交互作用効果について検討を考えた。関係予期 3 条件毎に、16 話題項目各々について、自己の情報を長所あるいは短所と答えた者のうち、当該の項目を「是非知らせたい」あるいは「絶対知らせたくない」に分類した者の比率を算出し、高・低 SE レベル群間で比較した。

結果は表 3 に示す。表 3 を概観すると、COO 条件では、長所を「是非知らせたい」に分類する者が高 SE レベル群より低 SE レベル群に多い傾向が見受けられる。一方 COM 条件においては、長所を「是非知らせたい」とする者、及び短所を「絶対知らせたくない」に分類する者が高 SE レベル群に多く、短所を「是非知らせたい」に分類した者は逆に低 SE レベル群に多くなっていることが読み取れよう。NON 条件には、SE レベルに顕著な傾向の差異は認められなかった。

考 察

本研究では、将来の相互依存関係予期という対人的文脈のなかで、人は、自尊感情レベルと照らして関係を満足いくものにするべく、いかなる自己開示及び秘匿を行おうとするのか、その開示・秘匿意向の差異を検出し、対人関係の親密化過程における自己開示の機能に言及することが目的であった。

分析の結果、関係予期要因3条件下において、しかも、同じ状況内であっても開示者のSEレベルによって、特徴的な開示・秘匿意向タイプが認められた。そこで、以下3つの状況それぞれにおいて抽出された開示・秘匿意向の特徴を詳細に吟味していきたい。

まず、COO条件においては、バックグラウンド、友人関係、アルバイト課題に関する能力の3つの話題領域について、長所、短所いずれであっても、“自己を「是非知らせたい」とするタイプの開示者が多く、積極的な開示意向を形成させることが明らかになった。

この結果は、下斗米（1990a, 1990b, 1991a, 1992）の議論と一貫している。人が他者と親密な関係を営む過程においては、その時々で付与される課題を合理的に解決する必要が生じてこよう（Lewis, 1972, 1973; Murstein, 1977）。例えば、異性関係で言えば、結婚を契機に、炊事や育児など家事を協力して行わなければ、夫婦関係の維持は困難となろう。そこで、役割分担が発生してくると考えられる。ところが、この相互の役割期待とその分担は、当事者間でどのような特性において自分は長じており、あるいは劣っているのかを開示し合い、互いの類似・異質点についての共有された知識を基盤に作られ合意されるものであろう（下斗米, 1990b）。つまり、本研究で設定したCOO条件は、アルバイト課題を協同で合理的に解決する上に役割分担の明確化が必要な事態であったという意味で、段階理論と同様の枠組みで捉えることができると考えられる。積極的な開示

意向が認められた背景には、将来の協同関係予期に際して、人は、自らの長所を開示し合い、課題解決に適切な役割を決定することが必要とされていたことが挙げられる。また仮に、能力上、課題解決に自分の貢献が少なくならざるを得ないような役割が与えられれば、相手の報酬をも低めることになる。役割分担の際に、こうした恐れのある役割を回避するために「……は不得意なので宜しく願います」類の主旨で、短所についても開示することが求められるのであろう。そして、こうした長・短所いずれにおいても積極的に開示することにより、互いの類似・異質性認知の妥当化を促進し、適切な役割が分担され合うようになるのであろう。対人関係の親密化過程においても、適用するに意義ある知見であると考ええる。

ただし、積極的な開示意向は、こうした役割分担のためだけに生じたのではないと言える。この根拠は、SEレベルに注目すると、低SEレベルの者は高SEレベル者に比して、自分の長所を「是非知らせたい」と考える傾向が認められたことによる。この条件下では、とりもなおさず相手と助長的な関係を形成しなければならない事態である。ところが、助長的な関係を形成することは、少なくとも相手に自分が協同作業のパートナーとして受容されていることが前提となろう。しかし、梶田（1967, 1980）によれば、低SEレベル者は、高SEレベル者に比べて他者が自分を受容したり承認する程度を低く見積もるといふ。この知見を援用すれば、低SEレベル者は、高SEレベル者以上に相手から受容を図ろうとする動機づけが高まったために、自分への評価が肯定的なものとなるよう長所をとりわけ開示したものと解釈できよう。

この結果は、まずもって下斗米（1990a, 1990b, 1991a, 1992）の指摘する3位相のうち、自己開示が次の位相であるところの対人認知に影響を及ぼしているとの指摘の妥当性を傍証するものである。しかし、それ以上に、自己開示が、報酬とコストを統制するという社会的統制（social control）機能（Derlega & Grzelak, 1979）ばかりでなく、印象管理の面からも同時に機能していることを示していると言える。

COM 条件についてはどうであろうか。この条件下においては、積極的な秘匿意向を意味する「絶対知らせたくない」タイプが最多となっていた。この結果だけをみれば、COM 条件のように役割を期待し合う必要もなく、むしろ、いわば敵に手の内を探らせないため秘匿意向が高まったものとするれば、経験的にも理解容易であろう。しかし、このような秘匿意向ばかりでなく、「是非知らせたい」、「課題能力のみ「是非知らせたい」、あるいは「別段知らせても構わない」タイプもそれぞれ2割前後見受けられ、多様なタイプの混在する状況となっていた。この意味では個人差が大きいと言えよう。

そこで、SE レベルを考慮したところ、COM 条件で高 SE レベル者には、自らの長所を「是非知らせたい」とする一方で、短所は「絶対知らせたくない」と考える傾向が認められた。こうした傾向は次のように解釈できよう。高 SE レベル者は、低 SE レベル者よりも競争的になることが PD ゲームを通じた研究で知られている (e.g., Faucheux & Moscovici, 1968; Pepitone, 1964)。この現象を達成動機の差異によるものとするか、自己確認過程 (e.g., 下斗米, 1988, 1990a; Swann, 1983) から説明するか議論の余地あるところであろうが、いずれの説明原理であっても、高 SE レベル者は課題成績で相手に優ろうとの動機づけが高くなることを予想できる。従って、高 SE レベル者は、自分の短所を隠し長所を積極的に伝達することで、競争関係における自分の優位性を相手に印象づけて、有利な戦況を展開しようとした結果なのではなかろうか。

また、低 SE レベル者には、自分の短所をあえて「是非知らせたい」とする者が多く見受けられた。これは、成功期待を低く見積もる低 SE レベル者が、競争の敗北による自尊感情レベル低下の防衛を図ろうとした、セルフ・ハンディキャッピング (self-handicapping) 現象として理解できよう。

このようにみてくると、COM 条件下における自己開示は、戦略的 (strategic) な色彩を帯びた用いられ方をされることがわかる。しかしこの状況においてもまた、戦略は SE レベルにより違えども、将来に予期される関

相互依存関係の予期と自尊感情レベルが自己開示・秘匿意向に及ぼす効果（下斗米）

係において問題となる報酬とコストを相手に対する印象管理を通して統制するために、自己開示が機能し得ることを示している。

NON 条件下では、将来他者と何等の関わりなく単独に作業を行うという点で他の2条件と異なる。すなわち、COO や COM 条件下で議論されたような、開示者自身の報酬を統制するために自分の印象を管理する必要のない事態である。“「別段知らせても構わない」”タイプで大多数が占められているという結果もこの点で理解が容易であろう。

下斗米（1984）は、この“「別段知らせても構わない」”タイプは他のタイプに比べて、相手の自己開示によって開示か非開示かが大きく変動することを明らかにしている。こうした状況下では、人の自己開示は相手の開示に依存する傾向が強いと言える。そして、その依存傾向は、返報性規範にもとづくものと考えられよう。

NON 条件には、COM や COM 条件のような積極的かつ明確な自己開示・秘匿意向が認められない。しかし逆に言えば、将来に関係をもたないことが予期される他者に対しては、大量の、そして内面的な自己開示を行う可能性が潜在的にあるとも考えられよう。見ず知らずの他人と偶然乗り合わせた列車のなかで驚くほどに内面的な情報を自己開示するという、いわゆる“stranger on the train”現象が生起する一端は、こうしたことにも帰因するのであろう。

さて以上のように、本研究では、自己開示及び秘匿意向が、被開示者との予期される関係の構造という対人的文脈と、開示者自身の自尊感情レベルとの交互作用によって強く規定されていることが示された。そこで、得られた主たる結果に対して、下斗米（1990a, 1990b, 1991a, 1992）の仮定する対人関係の親密化過程3位相に従って解釈を試みたところ、自己開示は印象管理と社会的統制機能を有していることが指摘できた。このことは換言すれば、対人関係が親密化していく過程において、自己開示は、次の位相である対人認知に際して、その材料を提供するだけにとどまらず印象管理に、更に役割期待と分担の位相においては社会的統制にまで考慮の

相互依存関係の予期と自尊感情レベルが自己開示・秘匿意向に及ぼす効果（下斗米）

及ぶ、能動的で主体的な働きを果たしている、と言えるのではないであろうか。従ってまた、仮に社会的統制機能が十分でなく、分担された役割では課題の解決が図れない事態に陥ると、それまで印象管理してきた自己に対して、相手からの拒絶に合う危険も大きくなることが予想される（e. g., Derlega, 1984; Phillips & Metzger, 1976）。親密な対人関係が崩壊する1つの契機であると考えられよう。今後、こうした議論から提出される仮説を吟味し、その妥当性を検討していく必要があると思われる。

引用文献

- Altman, I, & Taylor, D. A. 1973 *Social penetration*. Holt Rinehart. & Winston.
- Archer, R. L. & Earle, W. B. 1983 The interpersonal orientation of disclosure. In P. B. Paulus. (ed.). *Basic group processes*. New York, Berline, Heidelberg, Tokyo : Springer-Verlag. chap. 12, pp. 289-314.
- Cozby P. C. 1973 Self-disclosure : A literature review. *Psychological Bulletin*, **79**, 73-91.
- Cravens, R. W. 1975 need for approval and the private versus public disclosure of self. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43** (3), 503-514.
- Derlega, V. J. 1984 Self-disclosure and relationships. In V. J. Derlega. (ed.). *Communication, intimacy, and close relationships*. Jossey-Bass. chap. 6, pp. 151-176.
- Derlega, V. J. & Grzelak, J. 1979 Appropriateness of self-disclosure. In G. J. Chelune. & Associates. (eds.). *Self-disclosure*. Jossey-Bass. chap. 1, pp. 1-9
- Doster, J. A. & Nesbitt, J. G. 1979 Psychotherapy and self-disclosure. In G. J. Chelune. & Associates. (eds.). *Self-disclosure*. Jossey-Bass. chap. 7, pp. 177-224.
- Ellison, C. W. & Firestone, I. J. 1974 Development of interpersonal trust as a function of self-esteem, target status, and target style. *Journal of Personality and Social Psychology*, **29** (5), 655-663.

相互依存関係の予期と自尊感情レベルが自己開示・秘匿意向に及ぼす効果（下斗米）

- Faucheux, C. & Moscovici, S. 1968 Self-esteem and exploitative behavior in a game against change and nature. *Journal of Personality and Social Psychology*, 8, 83-88.
- Jourard, S. M. 1958 A study of self-disclosure. *Scientific American*, 198, 77-82.
- Jourard, S. M. & Lasakow 1958 Some factors in self-disclosure. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 56, 91-98.
- 梶田 毅一 1967 自己評価と自己のパフォーマンスの評価—他者に感じる魅力を規定する要因として— 心理学研究, 38, 63-72.
- 梶田 毅一 1980 自己意識の心理学 東京大学出版会
- Kerckhoff, A. C. & Davis, K. E. 1962 Value consensus and need complementarity in mate selection. *American Sociological Review*, 27, 295-303.
- 久世 敏雄 1975 青年期の自己開放性に関する1検討—対象の類型の観点から— 名古屋大学教育学部紀要, 第22巻, 1-12.
- Levinger, G. & Snoek, D. J. 1972 *Attraction in relationships: A new look at interpersonal attraction*. General Learning Press. : Morristown, N. J.
- Lewis, R. A. 1972 A developmental framework for the analysis of premarital dyadic formation. *Family Process*, 11, 17-48.
- Lewis, R. A. 1973 A longitudinal test of a developmental framework for the analysis of premarital dyadic formation. *Journal of Marriage and The Family*, 35, 16-25.
- Maslow, A. H. 1954 *Motivation and personality*. New York : Harpre & Row.
(小口忠彦監訳 人間性の心理学 産業能率短期大学出版部)
- Murstein, B. J. 1977 The stimulus-value-role (SVR) theory of dyadic relationships. In S, Duck (Ed.). *Theory and practice in interpersonal attraction*. Academic Press ; London.
- Pepitone, A. 1964 *Attraction and Hostility*. New York ; Atherton Press.
- Phillips, G. M. & Metzger, N. J. 1976 *Intimate communication*. Boston : Allyn & Bacon.
- Rogers, C. R. 1951 *Client-centered therapy: Its current practice, implications and therapy*. Boston Houghton. (友田不二男訳 精神療法 ロジャース選集, 第2集 岩崎学術出版)
- Rosenberg, M. 1965 *Society and adolescent self-image*. Princeton, N. J : Princeton university Press.

相互依存関係の予期と自尊感情レベルが自己開示・秘匿意向に及ぼす効果（下斗米）

- Rosenfeld, H. M. 1966 Approval-seeking and approval-inducing function of verbal and nonverbal responses in the dyad. *Journal of Personality and Social Psychology*, 4 (6), 597-605.
- 佐藤寛之・下斗米淳・飛田操 1988 私の秘密—秘密を通してみたコミュニケーションの規定因としての対人関係について 日本教育心理学会第30回大会発表論文集, 602-603.
- 下斗米 淳 1984 相互依存関係の予期と“自己開示”との関係について 学習院大学人文科学研究科 昭和60年度修士論文.
- 下斗米 淳 1986 将来の相互依存関係の予期と“自己開示”との関係について 日本心理学会第50回大会発表論文集, 682.
- 下斗米 淳 1988 社会的フィードバックが受け手の自己概念変容に及ぼす効果—送り手についての受け手の認知が果たす役割— 心理学研究, 59 (3), 164-171.
- 下斗米 淳 1990 a 社会的フィールドバックへの対処方略の類型化と、その選択の規定因に受け手の感情が及ぼす効果 社会心理学研究, 6 (1), 52-61.
- 下斗米 淳 1990 b 対人関係の親密化に伴う自己開示と類似・異質性認知の変化 学習院大学文学部研究年報, 37, 269-287.
- 下斗米 淳 1991 a 対人関係の親密化に伴う葛藤原因の推移 日本グループ・ダイナミックス学会第39回大会発表論文集, 125-126.
- 下斗米 淳 1991 b 対人関係の親密化に伴う葛藤原因の推移Ⅱ 対人行動研究会第12回大会ワークショップ「対人葛藤」資料, pp. 1-4.
- 下斗米 淳 1992 親しくなる 松井豊（編）対人心理学の最前線 サイエンス社, 3章, pp. 30-39.
- 鈴木 徳実 1981 Self-disclosure（自己露出）質問紙における話題の公的、私的反映—社会心理学的観点からの一考察— 関西大学大学院人間科学, 第17号, 53-70.
- Swann, W. B. 1983 Self-verification: Bringing social reality into harmony with the self. In J. Sulus. & A. G. Greenwald. (Eds.). *Psychological perspective on the self. (vol. 2)*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. pp. 33-66.
- Taylor, D. A., Altman, I., & Sorrentino, B. 1969 Interpersonal exchanges a function of rewards and costs and situational factors.: Expectancy confirmation-disconfirmation. *Journal of Experimental Social Psychology*, 56, 91-98.
- Thibaut, J. W. & Kelley, H. H. 1959 *The social psychology of Groups*. John

相互依存関係の予期と自尊感情レベルが自己開示・秘匿意向に及ぼす効果（下斗米）

Wiley.

長戸 啓子 1973 自己評価、他者からの評価、および対人的態度の関係に関する一研究—コミットメントおよび協同・競争の効果について 心理学研究, 44 (3), 115-123.

山本真理子・松井豊・山成由起子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30 (1), 64-68.

(心理学科 助手)